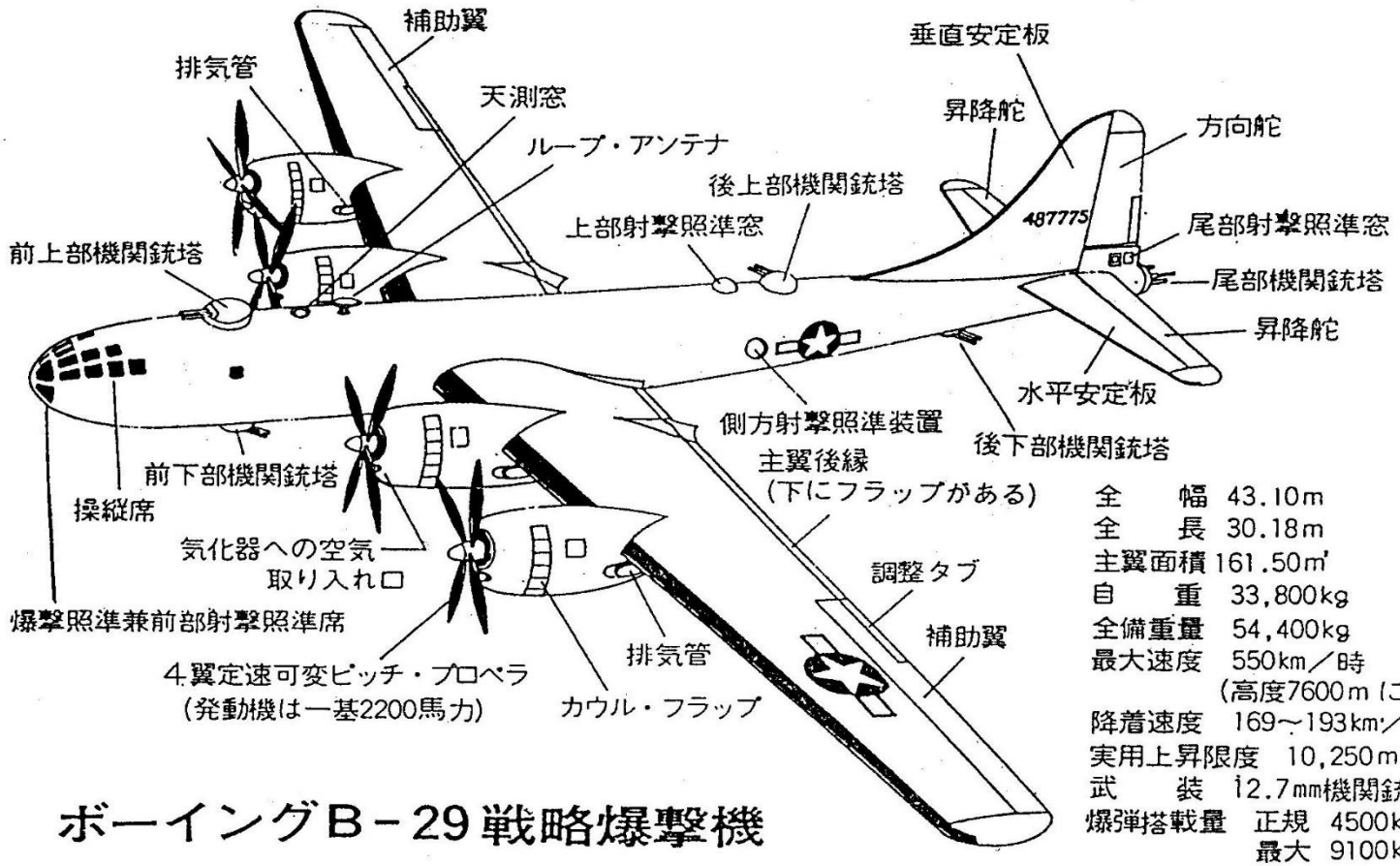
04年

# 第１６回
# 戦争体験を語り継ぐ集い
# 戦時体験記録集《第１１集》




全　　幅　43.10m
全　　長　30.18m
主翼面積　161.50㎡
自　　重　33,800kg
全備重量　54,400kg
最大速度　550km／時
(高度7600mにて)
降着速度　169～193km／時
実用上昇限度　10,250m
武　　装　12.7mm機関銃×10
爆弾搭載量　正規　4500kg
最大　9100kg
乗　　員　10～14名

## ボーイングB－29戦略爆撃機

ところ　緑生涯学習センター
月・日　平成１６年７月１０日
戦争体験を語り継ぐ会実行委員会

## ◎発刊のことば

四月初め緑区鳴海町有松裏の「きよすみ保育園」では入園式が行なわれた。我が子の晴姿を父母達はデジカメ、携帯電話、ビデオでおもいおもいに記念の収録をしようと大いに賑わっていた。平和の証の一コマを確認することができた。

六十年前、太平洋戦争の最中、ここを卒園し昭和十九年四月、鳴海国民学校東分校へ入学した。この年の暮から名古屋市内の軍需工場への爆撃が激しくなり、翌二十年八月十五日敗戦まで連日のように続いた。空襲警報、防空壕への避難、登下校中に見たB29爆撃機、爆弾落下地の大きな穴、爆弾、焼夷弾の破片回収……が、スチール写真となって記憶に残っている。

小学一、二年生にとって恐ろしいこの体験はいまでも思い出す。二度とこの体験は孫子にはさせたくありません。今年も諸兄姉から貴重な体験を綴っていただきました。じっくりお読みいただき平和の維持にお力を貸してください。

## 目次


「逆縁時代」と昭和呼びたい　橋詰　四郎　一頁
私は十六歳で兵隊になった　鈴木　重治　二頁
謹んで故山口曹長の英霊に捧ぐ　川口　篤孝　五頁
油脂焼夷弾　田野　武　一四頁
命を考えてください　小出　信子　一六頁
目の前で校舎炎上　浅野　憲治　一八頁
飛行機行進曲　近藤　匡一　二〇頁
私の戦争体験　広田　武司　二二頁
黒河事件に巻き込まれる　西向　克巳　二五頁
黒河事件今も忘れじあの苦闘　上村喜代蔵　三三頁

# 「逆縁時代」と昭和呼びたい

橋詰　四郎

朝日新聞、二〇〇三年（平成十五年）八月二十七日の歴史シリーズに載った昭和二十年十一月現在の人口構成図（※本文左端に再録）を見て、幾つかの過去の恐ろしさがよみがえった。

戦争を知らぬ年代の人たちにも、海外派兵の愚かさを教え訴える内容をくみ取ることができ、私はこの図を「逆縁図」と呼ぶことにする。「逆縁」とは親より先に死ぬことだ。

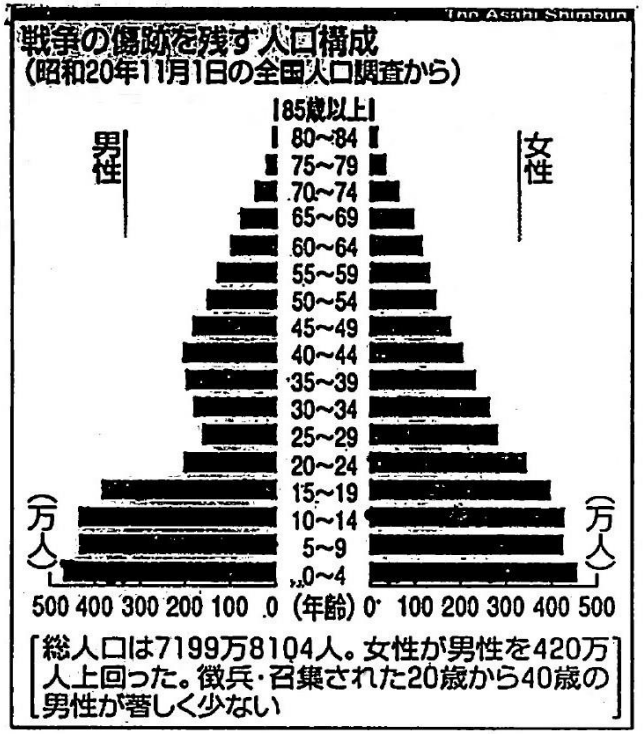
五歳刻みの図に示された二十歳から三十九歳までの男子数の著しい減少は、「国益」のためと徴兵された兵士の犠牲者数と位置づけられると思う。

何より驚いたことは、この年齢層は、ご両親健在の年代であり「逆縁死」であるからだ。

この減少年代が今も生きていて、長期に及ぶ犠牲と悲しみを背負わされている。シベリアに抑留された私が持っている、一個分隊十四人の写真中、日本に生還したのはたった四人だ。他は八月十五日の敗戦を知らず二十一日まで、強力なソ連軍戦車軍団と戦い死んだり、望郷の願いもむなしくシベリアで憤死した。

「昭和の日」制定や海外派兵は、再び「国益」の名で日本を「逆縁の時代」に戻すのではないかと、私は心配だ。

２００３年（平成１５年）８月２７日
朝日新聞記事を採用しました。




（この投稿は朝日新聞二〇〇三年（平成十五年）九月二十四日「声欄」に発表されたのを、投稿者の了解で掲載しました。）

# 私は十六歳で兵隊になった

鈴木　重治



私は大正十五年生まれの七十八歳です。昭和六年関東軍は満州鉄道を爆破し、中国軍の仕業と因縁をつけ十五年戦争のスタートになる満州事変が勃発。昭和十二年に中国軍を誘発し、日中戦争のスタートになった日支事変が、そして昭和十六年アメリカ、イギリスとも戦争を始めた。

このように私の成長と一緒に日本の侵略戦争は拡大していった。しかし侵略戦争と知ったのは戦争に負けてからで、それまでは東洋平和のための正義の戦争でアメリカ・イギリスは鬼畜と教育され、日本中が軍国主義一色に沸き立っていた。小学生の私達は新聞紙で折った兜を帽子のようにかぶり、遠回りだけど米津神社（西尾市）に兵隊さんの武運をお祈りしてから学校に通う日課だった。

戦争の長期化と拡大化で成人男子は兵隊にとられ、農業も、商店も、工場も働き手は女と高齢者になり、学生も無理矢理文句無しに働かせる徴用制度になり、私も工員として徴用される年齢になった。しかし誰一人文句を言う人もなく「一億一心火の玉だ」「ほしがりません勝までは」の合い言葉に励まされ、天皇陛下の御為に必勝の信念で私は「神国日本」に神風が吹くと教えられ頑張った。

その頃の少年の憧れは、海軍予科練の七つボタンと陸軍少年航空兵と少年戦車兵であり、雑誌も男子は少年倶楽部、女子は少女倶楽部。少女倶楽部には”来たれ従軍看護婦！“少年倶楽部には”来たれ少年航空兵！来たれ少年戦車兵！“の広告があふれ国を挙げて募集していた。学校で先生も少年兵に応募することを勧め、合格すると本人は勿論一家、学校や地域社会の名誉で、村長さんや区長さん、校長先生の激励の言葉と、地域社会全員に万歳万歳と送られ、血湧き肉躍り出征して行く姿を見て、僕も早くと思うようになった。

すでに志願して行った同級生も何人かいた。独りっ子の私は両親に、徴用されて工場に行くより、志願して兵隊に行くと頼み、両親は許してくれた。私は子ども心にも兵隊になり天皇陛下の御為に名誉の戦死をしてもよいと思っていた。親も、独りっ子の私を兵隊になるなとは言えない、軍国主義の時代だったのである。

私は十六歳で少年砲兵採用試験に合格し、昭和十八年十二月一日横須賀の陸軍重砲兵学校に入校が決まった。その日は小学校に小学生、先生、村の人達、区長さんも集まり、行列して米津神社に参拝、祝辞、激励を受け米津駅まで行進。駅前広場は見送りの人で一杯になっていた。発車の時刻に合わせ花火まで打ち揚げられ、万歳万歳の歓呼の声で私の出征、晴の姿を祝福してくれた。

陸軍重砲兵学校は重砲兵幹部養成と少年重砲兵生徒隊の教育で、昭和十七年が一期生十五名。私達は二期生で百九十九名が入校した。学校と言っても軍隊で新兵である。六時の起床から二十一時三十分までビッシリプロクラムが組まれ、起床と共に稜威神社に参拝、宮城遥拝と故郷の家族に挨拶。午前は精神訓話と音感教育と学科。午後は訓練と各種競技、夜は自習。消灯で終り、個人の考える時間など皆無で、床に入るとばたんきゅう直ぐ眠るほど、肉体はくたくたに疲れきっていた。

訓練は体力と精神力を鍛えるためきつく、育ち盛りの少年に食事は少なく、毎食、毎日ひもじく腹が減って腹が減って辛かった。空腹には勝てず、命がけで残飯拾いで飢えをしのいでいた。まさか軍隊で残飯漁りをするとは。

一番嬉しいのは親の面会である。食べさせようと持ち込んだ寿司、ぼた餅、いろいろなお菓子などなど腹一杯、苦しいほど食べて下を向くと口から出るぐらい。余ったのは戦友と分け合って、それは次ぎに戦友に面会が来たとき、今度は私が貰えるからだった。毎日がひもじく食べ物で戦友愛が生まれるとは。

厳しい軍隊生活も少しづつ慣れ、夜眠りに着く頃横須賀線を走る電車の音が聞こえてくると、あの電車に乗れば故郷に帰れると泣いたことも度々あった。

翌年、昭和十九年三月、清水市の三保分教所に転営。ここは有名な「羽衣の松」の近くで、富士山を一望の「三保の松原」で環境は最高であった。音感訓練も順調に逐次応用訓練に入り、各種船舶のスクリュウ音、潜水艦のタービン音の判別など実習教育も行なわれた。三保時代も空腹であったが、一番の思い出は駿河沖の大地震で、清水市街は全部家屋が倒壊し、私達は復旧作業に三日間出動した。

食事は横須賀時代と変わらず不足で我慢が出来ず、分教所の隅に埋めてある薩摩芋に目を付け暗くなるのを待ち、横須賀時代のように「特攻隊」を編成し残飯捨て場から食べ物を拾ったように「勇士」が「芋泥棒」を成功させ、内務班に戻ると皆で分け合って飢えをしのぎ、芋倉の芋を全部盗み食べ尽くした処で発覚し、全員営庭に整列させられ拳骨で倒れるまで殴られた。

軍隊も食べ物がない時代になり、市民の間では兵隊さんも満足に食べれないようでは戦争も負けると噂されるようになっていたが、我々の「必勝の信念」は固かった。

その年の六月三期生二百名が入校し、私は三期生の教育に当たり、十二月に先輩達が繰り上げ卒業し、優秀な者は兵長に進級し軍刀を下げて出陣した。翌、昭和二十年三月二日私も卒業し階級も兵長に進級し、決められた日時に門司集合を命じられ、途中故郷に「金筋一本の兵長」の姿で錦を飾ることが出来、両親や友人達と会うことができた。皮肉なもので日本の空襲が本格的になる前

に、私は日本を離れることになった。

門司に集められた兵は二百名、京城の朝鮮軍司令部まで私が引率することになり、朝鮮軍司令部で私達重砲校卒業の三名、四国出身の田辺、九州出身の前田、私の三人は釜山要塞に赴任し、私は私より年配の初年兵教育に当たった。

要塞は四十糎加農砲二門、十五糎加農砲四門、七糎高射砲四門、二十八糎榴弾砲四門が配備され、朝鮮海峡を見下ろす位置にある巨大要塞である。

特に夜間の敵国の潜水艦や視界困難時に航行する艦船、船舶の敵味方識別は非常に難しい。この難しい困難の時、水中聴音器や水中標定器で識別することが出来るのは私で、これが私の釜山要塞での任務でもある。しかし物資不足機材はなく「陸に上がった河童」で本領を発揮することは出来なかった。

五月から朝鮮半島にもＢ２９は飛来し、釜山港など各港や海峡に機雷を投下した。ある日将校が小舟で浮遊機雷を引いてきて桟橋の杭に縛り行ってしまった。機雷はカランコロンと音を立て波まかせに浮いていた、好奇心もあり何人かが見ていた、突然大音響と共に爆発。水しぶきと砂利土砂大きな石まで降るように落下してきた。一段落し人員を確かめらた三人足りない。機雷のそばに三人いたのを見ているので間違いない。皆で三人分の肉片を拾って数合わせをしなくてはいけない、頭なら三つ揃えばよいが、手足なら六本づつ揃えることになる、木端微塵と戦争で人命軽視時代なので、揃えず打ち切ってしまった。

昭和二十年八月十五日、さっぱり判らない重大放送が終戦の知らせだった。一人の将校がこれはデマだ。今から切り込みに行くと力んでおったが、ここには敵のアメリカ兵は一人もいないのにと思っていたら、本人も気付いたのか次第に放心状態になり落ち着きを取り戻した。やる事がなく毎日海岸で魚釣りや小舟で漁をした。要塞地帯で漁師も入れない魚の天国海域なので毎日大漁で、食べて遊んで体重が増えデブになった。

暫くして米軍が接収に来ると言うので武装したまま要塞を出発。汽車で太田に行き、まだ武器を携帯しているので、巡査に協力して治安任務に当たることになり、私は礼山邑の水田巡査部長派出所勤務。十名の日本兵と一緒に町の治安維持に当たった。水田巡査は奥さんと女の子二人の四人家族で、九州天草出身と言っていた。少年兵の私は若い十代で二人の姉妹にもてた。

その内朝鮮社会に変化が現れ出した。朝鮮が戦勝国になり侵略していた日本が敗戦国になり、天地があべこべにひっくり返ったのだ、そしてアメリカ軍が現れると、朝鮮独立万歳と叫ぶ若者が木刀を振りかざして、日本人巡査の言うことを聞かず、親日派の朝鮮人や日本人を襲撃するようになった。私達はアメ

リカ占領軍と協議しM・G・P（アメリカ軍政補佐官）の腕章を巻き治安任務を遂行した。また治安の悪い町へ行かされ治安の回復に勤めた。衣服と食料の倉庫警備もした、朝鮮の若者たちは鍬やスコップを持ち、群衆で暴徒となり襲撃してきた。私は十六歳で兵隊になり今迄一度も鉄砲を撃ったことはなかったが襲撃を防ぐため、この時始めて空に向け威嚇射撃をし暴動を鎮圧した。

武装解除は昭和二十年十月九日慰山で受け、乗船のため釜山港に向い、翌十日乗船同日、出港。博多に十一日上陸した。船中では威張っていた将校達が大勢の兵隊に罵られ制裁を受けていた。私も苛められた上官がトイレに入った隙にスボンのベルトを海に投げ込み、今迄の鬱憤を晴らした。

博多に上陸、乗れないほどの満員の網棚に横たわりながら列車を乗り継ぎ、出発した故郷の米津駅に降り立ったのは昭和二十年十月十二日、秋祭りの前日で人々は十五年振りの、戦争も空襲もない平和な祭り準備にいそしんでいた。家に着いて最初に知らされたのは、一カ月前の九月三日父は私を待ち切れず死んでいた。父は中風の痛さを堪えながら、毎日ラジオで私の帰りを待ちつづけていたと聞かされ、ご心配をかけた親不孝を詫び落涙合掌した。残念無念。

こうして年老いた母親と私の二人の平和な生活が始まった。ふりかえると、子どもの頃は兵隊ごっこ。あこがれて入った少年兵の前半は空腹と鉄拳制裁で十六歳から十八歳まで殴られぱなしの二年半。後の半年は日本の空襲が激しくなる前、朝鮮に疎開したような転属で命拾いをした。星の数も金筋も増え、軍隊の飯の数も増えそれなりの楽もさせてもらった。同級生、同年兵には航空兵や沖縄へ向う途中潜水艦に撃沈された者。原爆やB29、艦載機、艦砲射撃で死んだ者もいた。もう戦争は子どもにも、孫にもさせてはいけない。合掌。

## 謹んで故山口曹長の英霊に捧ぐ

川口　篤孝

日本は明治六年一月（一八七三年）天皇の命令で徴兵制を施行。男子は軍人になることを義務とし。明治十五年（一八八二年）一月四日、天皇は軍人に賜りたる勅諭を下賜（王が家来に与えること）『朕ハ汝ラ軍人ノ大元帥ナルソ上官ノ命令ハ朕ノ命令ト思ウヘシ』と断言したため、上官の命令に従わぬ者は不忠義のレッテルを貼られ、本人は勿論、親兄弟姉妹、親戚一族に天皇陛下へ反逆者、非国民の一族と汚名が及ぶようになり、このため上官が「黒」を「白」と言えば「白」として従う軍律となり、敵には残虐非道、御上には『羊の如く

従順』になる軍律が強制され、性格温厚な日本民族を好戦者に洗脳（マインドコントロール）した。これはその犠牲者の実話である。

故山口曹長は静岡県網代町出身。中国の広水という町を占領し、付近の中国軍と戦闘を繰り返していた。部隊は三師団の内、豊橋の戦闘部隊と名古屋の輜重部隊であり、山口は輜重第一中隊の小隊長であった。中隊長は幹部候補生出身の関中尉、平時なら中隊長は士官学校卒業生が任官されるが、日本は戦線を拡大し大量の兵を動員したので将校数が不足し、普通の大学卒業生を短期養成し将校不足を補なった。

関中尉は短期養成の「即席将校」で二百名程の兵の最高位として君臨したのである。関は上官の地位を最大限に利用し我儘勝手に振舞い、軍人としてでなく生活面で鬼中尉と恐れられていた。一例だが食事が口に合わぬと「中隊長は犬ではないぞ、この食事は何だ」と、父親のような年齢の兵に悪態の限り罵り鉄拳制裁が常で、男世帯だけの不満を抵抗、反抗者もないことをいいことに威張りちらしていた。当然兵の不平不満を押さえるのは二等兵から叩き上げ、小隊長になった山口の人徳が、かろうじて中隊の秩序を保つ役目を果たしていた。兵隊達は「俺等は何のために海を渡り中国戦線に来たんだ、天皇陛下の御為に家族と故郷に別れを告げ、命を投げ出して戦争をしているのだ、中隊長に殴られるためではない、これでは死んだほうがましだ」と口惜しがったが、関はそしらぬ顔で鉄拳制裁を繰り返しては溜飲を下げているサデストであった。

事件は昭和十七年九月夜に起こった。兵達は山口小隊長には秘密裏に関中隊長襲撃を計画し、山口が週番勤務の留守を狙い実行した。この行動は下士官も兵も、良くしてくれる山口には迷惑が及ばないようにの配慮があった。

山口が週番で任務についていると中隊長室辺りで悲鳴が上がった、山口は関がまた部下を殴っているのかと最初は思ったが、いつもと様子が違うので見に行くと、七～八十名の下士官・兵が渦となり棍棒で関を殴り。関はすでに半死半生で気を失っていたが、猛り狂う兵達は尚も殴り続けていた。

山口は猛り狂う兵達をなだめ解散させると関を介抱し蘇生術で蘇生させた。気がついた関は山口一人がいるので「介抱の要領を使っている憎っくき山口」と、地元の憲兵分署に山口を告訴したが、関の悪評が知れ渡っているので不問にされ、怒り狂った関はそれではと師団司令部に告訴したが、ここにも関の悪業は伝わっていて不問にされた。蛇の様に執念深い関は治まらず、遠く離れ自分の悪評のまだ届かぬ漢口憲兵隊本部へ駆け込み告訴した。

憲兵隊本部では威張り散らす上官や兵が、何故か戦闘になると死ぬので不審

に思い調査するが、戦闘中の出来事で真相は判らず困っていた。又、日本へ帰る兵達が残る兵達へ「お前達に何も出来ないが、一つだけ喜ぶことをしたから」と謎めいた言葉を残し日本へ向け出発してから、悪評高い中隊長が簀巻きにされ殺されていて、残った兵達は「これだ」と感謝したが、犯人は判らず抗日分子の仕業として戦死とした。このような事件は日本軍の各所で多発していた。憲兵隊本部は、関中尉の訴えを『上官の命令は朕の命令である』の軍律厳正の格好の事件として告訴を取り上げ、上官、即ち天皇に反抗したらどうなるの「見せしめ刑」にすることにした。

逮捕を予感し、山口は部下全員を集め「この事件は私一人がやったことで諸君は無関係である、一切の責任は自分一人で取るから動揺せぬよう」にと言い渡した。が、部下達は「山口小隊長を除く全員で中隊長を殴り殺す計画でした。小隊長が早く来たから中隊長は助かった、責任は自分達にあり」と、小隊長は黙っていろと怒ったが、山口は「おそれおおくも天皇陛下の軍隊が、天皇と同じ上官に暴行を働くとは不忠義である。このような軍律を乱す者は俺一人で充分である、諸君は山口一人がやったと言って天皇陛下に忠義を尽くせ」だが部下達は卑怯者の汚名は嫌だと自発的に名乗り出て、山口は無関係無罪と訴え、他の中隊長や将校達も連判状で山口無関係の証明書を提出した。

この事件を天皇の軍隊の軍規粛正にと目論む検察法務官は訴えを無視し、山口を揚子江の河原で銃殺した。銃殺に先立ち山口に「関中隊長は一等兵に降格し危険な戦線へ行かせた」と告げた。検察官・憲兵は「武士の情け」と言ったが、将校や兵達は「白」を「黒」にする皇軍の軍隊組織に戦慄を覚えた。

そして山口の家族は国賊のレッテルを張られ、菩提寺は山口の遺骨埋葬を拒否する山口家の親、兄弟姉妹の苦難に進展していくのである。

山口は昭和十八年五月一日午前四時三十分、漢口西北方揚子江河原が刑場であった。刑執行官からの通知で死亡は四時三十六分と山口の戸籍台帳に記載されている。銃殺に先立ち長津真太郎主計曹長が面会している。山口は遺書を長津に託し、長津は遺書を軍公用封筒で、網代町長内田和三郎宛に「軍伝達書」として、二重封筒にして遺族へ渡すよう取り計らい「私文書」として内田町長宛に事件の経緯を伝え。本件を軍上層部が、天皇陛下直属の上官に対する侮辱暴行罪として格好の犠牲者にしたのであるが、この真相が世間に漏れ警官・特高警察・憲兵隊に知られたら、正道を批判する流言蜚語罪で町長は勿論、山口一家も逮捕拷問されるから自重するようにと求めた。遺書の文面は。

父上様、母上様。

儀作は帝国軍人の勤めを立派に果たして参りました。二十数年慈愛でお育て下さったご恩返しもせず、斯様な姿で帰る不幸をお許し下さい。

然し儀作は、決して恥ずかしい死でないことを確信しております。七生報国を期し天皇陛下に忠義を尽くします。

父上様・母上様・新太郎兄さん・つね姉さんも儀作を信じて下さい。

皆様のおしあわせをを祈りつつ。

と、認めてあった。死亡通知も遺書も役場を通して届けられたが、山口の遺骨は勲七等・陸軍曹長の位階勲等を剥奪され。荒縄でがんじからめに縛られたまま、中国戦線の安置所の隅に「軍律違反実物教材」資料扱いで展示放置されていた。上官へ不服従。即ち、天皇陛下への極悪人として銃殺された遺体は荼毘の後、骨までも罪人扱いとして荒縄で幾重にも縛り、漢口憲兵司令部から三師団片岡部隊に渡された。事件発生後八カ月が経過し、三師団傘下の将兵はすでに事件の真相を知っているので、骨壺の荒縄を解き名誉の戦死の儀仗扱いを行なおうとしたが、憲兵の目が光っていて断念した。その代りか骨壺の前には、誰が手向けるのか「水」や「野の花」が絶えなかった。

三師団は作戦のため出動し戦死者も出たが、一応の戦果を挙げて駐屯地に帰った。戦死すると衛生兵は戦死者の認識票と小指を切り取り小袋に納める。戦死者が複数以上になると誰の骨か判らなくなる。が、数だけは正確である。これが軍隊の員数合わせである。白木の箱はカタカタと音だけと言われたのはこのためで、遺骨は誰のかは判らないが、小指も切り取ることも出来ぬ負け戦の遺骨は、風雨に晒され野犬の餌になり、腐り土にかえるのである。これを「草むす屍（かばね）」と言う。

中国軍と戦い駐屯地に帰ると、将校も下士官も兵も荒れるのが常であるが、今度ばかりは異常な荒れ方であった。この作戦で戦死した戦友への悲しみの情が高まる安置所の隅に、山口の骨壺が荒縄で縛られたまま位牌もなく、山口儀作と荷札のような名前が張ってあるだけだった。狂人の中隊長に仕え、部下を可愛がった山口の遺骨に対する残酷な権力の仕打ちが拍車となり、感情のまま大暴れしたのである。兵も将校も。驚いた上層部は遺骨を日本へ移すことにした。普通、戦死者の遺骨は、屍（しかばね）衛兵に守られ丁重に扱われた後、日本の遺族の元へ送られるが、山口の骨壺は生き残っている将兵への「見せしめ」として、荒縄で縛られ置かれたままである。この「見せしめ処置」が戦闘から生還した将兵の高ぶった気持ちを更に逆なですると判り、満期除隊で日本に帰る者に持たして帰すことになるが、これが又、骨壺苦難の旅が始まる最初

になろうとは誰もが想像していなかった。

八月、別中隊だが山口と同じ連隊の熱海出身、岩井政雄曹長と伊豆熱川出身の稲葉源吾兵長が満期除隊となった。満期除隊とは健康で軍務に精励し、日本男子として天皇陛下に対し義勇奉公の任を立派に果たし、故郷に凱旋することで一家の誉れである。二人はこの栄誉に輝く帰郷よりも、山口の遺骨を持ち帰る任務を最大の喜びとし、残される将兵からも「頼むぞ」と励ましの言葉を受けていた。が。出発前日、憲兵立ち会いで中隊長から二人に命令が下った。遺骨は縄付きのまま稲葉兵長が持つこと、岩井曹長は罪人の遺骨を持つ稲葉を厳重監視すること。二人は目の前が真っ暗になりよろめき倒れそうになったと云う。命令受領後二人は満期除隊を原隊（名古屋の輜重隊）で受けず、明日ここで受け、直ぐ志願してここに残ろうと話し合った。

その夜消灯後、二人は中隊長の呼び出しを受け出頭した。中隊長の机には純白の新品の白布が広げたまま置かれていた。中隊長は二人に「この白布を拾ってくれ、そして明日衛兵所で発見されぬよう持ち出してくれ」時間にして三十秒。建前ばかりの軍隊で二人が始めて出会った本音。二人は中隊長の温情に泣き声をこらえ嗚咽した。誰にも話せないし悟られもしたら中隊長は厳罰だ。

殺され骨にされ、その骨までが罪人として縛られている山口が営門を出る。衛兵は営門を芥門とし英霊扱のない建前である。が、衛兵達は山口小隊長殿やっと帰れますねの顔で、号令は出来ないので各自がそれぞれ勝手に挙手敬礼で見送ってくれ、二人は乗船する漢口行きの列車に乗る駅に向かった。

営門が見えなくなるや二人は急いで遺骨の縄を解きにかかった。骨にされ縄で縛られてから四カ月目である。二人は嬉しくて縄を解く手が震えたと云う。中隊長室で拾った白布を出し、中隊長の温情で包み終ると二人は不動の姿勢で遺骨に挙手の敬礼をした。この時、事件発生から今に至る迄が走馬灯のように浮かび、互いの目から熱涙が滂沱の如く流れ出たと回顧談で話している。

稲葉兵長が英霊の帰還と同じように首から下げ、岩井曹長が遺骨と稲葉を監視でなく護衛することにした。これは憲兵立ち会いの中隊長の命令、稲葉が持ち岩井が厳重監視せよ。の、中隊長の『本音』に報いるためでもあった。

日本への順路は漢口から船で南京へ。陸路上海へ出て、日本へ向かう船に乗るのである。漢口に着いた二人は兵站宿舎に泊まり便船待ちをした。

漢口は大都市だけでなく日本兵の中継基地のため街は日本兵で溢れていた。すれ違う日本兵は下士官二人に守護された英霊に、栄誉礼をキチットしてくれ

二人は満足の思いであった。漢口は山口が投獄され処刑された地である。二人は乗船に先立ち遺骨を胸に抱き、山口を「見せしめ刑」に決定した中山路と華楼街の三叉路に建つ憲兵隊司令部監獄（刑務所）の前に立った。二人の思いは。船は静かに漢口を出航した。二人は銃殺された漢口郊外の揚子江岸に向かい挙手の礼で、上官であった山口小隊長の魂を慰め鎮魂した。

日本に上陸すると、すれ違う将兵は勿論、一般市民までが遺骨に対し敬意の礼を尽くしてくれ、二人は改めて山口の遺骨帰還の任務に付いたことに感謝しつつ、原隊の営門をくぐるや『建前』に愕然とし崩れ倒れ込むのである。

原隊・名古屋輜重第三連隊（戦後跡地に聖霊女子高等学校＝現在瀬戸市に移転）山口も稲葉も岩井もこの営門をくぐり兵隊になり、厳しい訓練を受けた後中国大陸へ出征し帰ってきたのである。稲葉と岩井は満期除隊の命令をうけ、市民となって故郷に凱旋するために。

一方、山口は。事件は三師団（約四万人）全員が「見せしめ刑の殉教者」と知り尽くしているが、罪状は上官暴行罪、即ち天皇陛下への反逆者として刑が確定し銃殺され、日本人として、とりわけ帝国軍人としてあるまじき極悪人で、軍人として名誉ある位階勲等も剥奪された人物である。兵隊でない者をたとえ遺骨にせよ、どのように営門をくぐらせるか。憲兵本部の目を怖れつつ『建前』と『本音』の狭間で苦慮し、受け入れに際し種々シュミレーションしたようである。

二人は営門を守る衛兵司令長に直立不動の姿勢で申告をする「岩井曹長、稲葉兵長は満期除隊のため中国戦線から原隊に到着しました」衛兵司令長は二人にねぎらいの言葉をかけたあと、持込申告書を出し『建前』を静かに話した後、二人が『何』を持ち込むかを申告書に記入して下さいと伝える。この『何』に二人はどうしてここまで苦しめるのだと、動顛し混乱し屈強な軍人として立っている気力を喪失してしまう。

司令長は建前として、山口小隊長は罪人で処刑され、もはや軍人ではない。これを輩出した輜重三連隊の名誉を傷つけたから霊安室に祀ることもできないし、すでに軍籍から除外されているので、栄光ある三連隊の営門をくぐらせることは軍規に反する。この度、稲葉兵長が満期除隊に際し、第三連隊第一中隊の誰か判らぬ者の遺失物を持ち帰ったので、司令長が預かり遺失物所有の家族を捜し通知し、家族が引き取るまで厳重保管すると云うのである。

持込申告書には、山口の遺骨も含め誰か判らぬ者の忘れ物として次のように記入された。

シャープペン一個・爪切り一個・写真一葉・他。

なんとこの「他」が『遺骨』である。写真は死を覚悟し憲兵隊に逮捕される直前に撮った生前最後の写真である。遺骨は衛兵司令長が預かり丁重に安置してくれるのである。これが検察官や憲兵に発覚しても責任は衛兵司令長一人で食止める最善の方法と考えたようであった。

網代役場から「遺骨とも遺失物とも解される難解文で○月○日○時輜重三連隊へ受領に出頭せよ」の「軍」からの通知書が父福太郎に届けられた。

「軍」に関する通知は召集令状も戦死通知も郵便でなく役場を通し行なわれ、出征兵士はエプロンの上に愛国婦人会・国防婦人会の襷をかけた女性を先頭に、地域全員で日の丸の小旗を振り、英霊の帰還には喪章を付けて迎えるのが義務であり、送迎に行かない者は天皇陛下に対し「非国民」とされ村八分の扱いを受ける日本全体が軍国主義一色の国であった。

この時すでに付近の市町村には、網代町山口福太郎の息子儀作は、軍隊で大変な罪を犯し銃殺刑にされ、遺骨も縄で縛られて帰されるとの噂が広まり、山口一家の耳にも届いていた。噂の出処は名誉の負傷をして帰された者が軍隊の恐ろしさとして話したのが、いつしか事件の全体像でなく、反逆・銃殺・縄付きの遺骨だけが独り歩きして広まっていったのである。それは違う！と言えない時代で、遺族は人々の前に小さくなって息を殺して生きるしかなかった。

遺骨は兄新太郎が名古屋輜重第三連隊に出頭し衛兵所で受領した。英霊なら部隊全員整列。また遺族が遺骨を持って営門を出るとき、衛兵司令長の号令で「捧げ銃」の栄誉礼も受けるのだが風呂敷包みの「遺失物」にはそれもなかった。衛兵所と営門の距離は歩数で数歩。営門を一歩出ると「娑婆」と呼ばれる一般社会のエリアである。営門を一歩出た途端「ひどい」と怒りが込み上げ、風呂敷包みを解くと純白の白布に包まれた遺骨箱が現れ仰天する、両掌で上・底・左右両面と指先でまさぐった。ない！。指先に遺骨を縛っている縄の感触はなかったのだ。新太郎は悲しみより有り難さが込みあげ、思わず衛兵所に向かい深々と最敬礼をするのである。そして、遺骨を胸に抱き弟の為に堂々と胸を張り名古屋駅まで歩き、道行く市民は遺骨に合掌をしてくれた。が、これができるのは名古屋駅までと新太郎自身が一番よく知っていた。

この日、新太郎が遺骨を受け取りに行くのを知っているのは内田和三郎町長・西島助役・役場の鈴木兵事課長の三人であった。事件発生以来この三人が山

口家への唯一の理解者して遺族を陰で支えていた。三人は人々がまだ眠っている時来宅し「私たちの来たのを近所の人が知ったら、またあらぬ噂が立ちますからと気持ちを伝え『建前上』遺骨のお迎えは出来ません」と伝え、持参した新品の蝋燭・線香の封を切り仏壇に灯し「遺骨が帰るまで消さないで下さい」と合掌して帰っていった。遺族は帰っていく三人の後ろ姿に合掌した。

網代駅に着く前、新太郎は遺骨を荷物のように風呂敷に包み、一秒でも早く連れて帰りたい気持ちを押さえ、あちこち時間を費やし夜遅く帰宅し、遺骨が家に入ったのを町の人は誰も知らなかった。それは事件発生と同じ一年後の昭和十八年九月であった。時に父も母も心労のため病床に臥す身でもあった。

「村八分」とは地域社会に於ける人々の付き合いに対する差別表現で、現在は使用禁止語である。十の内、八の付き合いは拒否します。残る二つは火事と葬式の二つだけは例外として付き合う、これが地域社会で暗黙の掟であった。

儀作の遺骨が帰ったことは少しづつ知れ渡り、噂がまた噂を広げていった「遺骨は縄付きであるとか無いとか。いや縄を解くと『御上』から叱られるのでそのままだとか。葬式を出せないのは縄で縛ってあるから」だとか。この無責任な噂に一家は人を怖れ次第に人嫌いになりノイローゼになると「山口の家族は天皇陛下に逆らって罰が当り気狂いになったと」噂の材料にしていった。

この噂の中で遺族は肉親の情とし、儀作の遺骨を早くお坊さんに念仏をあげてもらい『成仏』させ、先祖の墓にと気持ちが昂ぶり埋葬することにした。役場の手続きも済んだが、これを知った菩提寺教安寺の檀家から「国賊を埋葬すると寺格が傷つくから阻止する」運動が始まった。もういいかげんにしてくれ。一家は叫びたいが、それも出来ぬ世相に日本はがんしがらめに縛られ「見せしめ刑罰」はとどまることを知らぬ勢いで地域社会に浸透していた。

これを知った父福太郎は陶器の骨壺が熱くなるほど両手でしっかり抱いて号泣した。しかし埋葬の諾否は住職にありと檀家の反対を撥ね除け、住職は儀作の霊に「響挙儀名信士」の仏名＝戒名を付けて下さり、読経の中先祖の眠る墓にやっと入れてもらえた。会葬者はなく遺族は「村九分」の扱いを受けた。

軍国主義日本は、戦争で死ぬことが天皇陛下への最大の忠義であり、遺族の誉れであった。働き盛りの大切な大黒柱を亡くした遺族は「天皇陛下のために命を捧げた誇り」を墓碑に託し慰めることにし、墓碑の高さを普通の墓碑の倍以上の碑を建立していた。戦後この高い墓碑の林立する墓地に立ち、橋詰四郎は「枯墓地の高き碑はみな兵士のもの」と哀感胸に迫る俳句を詠んでいる。

普通なら儀作の墓碑は他の墓石より倍は高く、最上位に陸軍の☆印を配し『陸軍輜重曹長勲七等山口儀作之霊』と一行に刻まれる墓碑であるが、その全てを「見せしめ刑」で剥奪された「国賊」であるので、遺族は世間の目を怖れ小さな墓碑すら遠慮し建てず、戒名序列も最低の位階を甘んじて受けた。

儀作の姉「つね」は結婚した。デマは「つね」と一緒に嫁ぎ先まで付いてきた。「助一さんの嫁の弟は軍隊で脱走して捕まり死刑になった」と。付近の人は挨拶代りのように広げいていった。「見せしめ刑」の事情を知っていて結婚した助一は「儀作の死は立派だった、弟の死を誇りにしなさい」と口癖のように言って妻を励ましていた。

岩井は熱海、稲葉は熱川、この間に網代は位置し山口家は「国賊の家」の汚名を背負わされているのを知っていたが、二人は貝のように固く口を閉ざしていた。真実を言えば国家権力に踏み潰され、網代役場や遺族に迷惑が及ぶと知っていたからである。

こっそり墓参に行くと遺族だけではない気配なので、住職に聞くと、他にも儀作の墓の場所を訪ねる者。新婚旅行に伊豆を選び夫婦で来た元兵隊を墓まで案内した時「命の恩人の墓碑がない」と泣いたと。この人から儀作の事を聞かされ、そう言えば眼光鋭い男が墓を窺う時もあるので、裏口から帰したとも話した。負け戦になるほど特高の目は鋭さを増し、窒息寸前の世相に日本はなっていた。岩井はいつか立派な墓碑をと心に誓った。

天皇を中心にした神の国に『神風』は吹かず天皇の軍隊皇軍は壊滅した。岩井は昭和十七年九月殴打事件当時の生存者捜しを始めた。静岡・愛知出身者が多いので簡単と思ったが、太平洋ベルト地帯はアメリカ軍の空襲、艦砲射撃に曝され焼け野が原と化し、爆死・焼死・疎開・避難で人捜しは困難を極め、改めて国民全部、女も子どもも巻き込む戦争に戦慄を覚えたと云う。

昭和四十三年二月六日、東京・静岡・愛知・三重から十七名の男が儀作の墓前に集まった。呼びかけたのは遺骨を中国から持ち帰った岩井であり、呼びかけに応じたのは山口が「俺は関係ない」と言ったら、銃殺された人々である。

追悼供養は立派な碑の除幕式で始まった。ここに参列した『山口の身代わりで助かった』者達がお金を出し合ったのである。招待に出席出来たのは兄新太郎一人だけだった。ご両親・姉つね・役場の三人・檀家反対を無視し埋葬を決意した住職らは鬼籍に入り、すでに儀作の処へ行っていた。無念！合掌。

参列した一人がつぶやいた《俺達は身代りで助かったバラバと同じだ》この言葉の意味を解する者は誰もいなかった。

二〇〇四年　故山口儀作氏六十一回命日　五月一日記す。

# 油脂焼夷弾

田野　武

原始の時代より、火は人が生活していく上に絶対必要なものであります。

戦国時代の戦では、油に浸した布や綿花を矢の先に縛り、それに火を付け藁葺屋根や板塀に向け弓で射って、火災を起こす戦法がありました。

明治時代には、日清、日露の戦争。昭和には支那事変と、時代が変わるごとに当時、軍国主義の社会であった日本は、他国と戦争をして、その度ごとに勝利をおさめてきました。

そして昭和十六年（一九四一）には、日本国存亡にかかわる重大な大東亜戦争（太平洋戦争）をアメリカと始めました。

名古屋も、昭和十七年（一九四二）にアメリカの航空母艦から発進した艦載機により、初めての空襲を受けました。お城の周辺には陸軍の兵舎があり、そこに焼夷弾を落として、火災が発生し黒煙が空高く舞い上がりました。

これを期に各町内会では、防空演習（消火訓練）が盛んになり、空襲で火災が生じた時の用意のために、各戸口に防火用水を作り、バケツ、藁むしろ、竹竿の先に藁縄を付けた火叩き等を備えて、各町ごとに防空監視所を設置し、警戒警報が中部軍管区より発令される度に、町内の当番監視員が屋根の上に登って、敵機来襲の監視に当たりました。

昭和十九年（一九四四）頃からは、戦争の雲行きが悪くなり、サイパン、グアムを守っていた日本軍は全員玉砕となり、この島はアメリカ空軍が占領し、B29爆撃機の飛行場を作り、日本の各都市への空爆基地としたために、名古屋も頻繁に空襲を受けることになりました。

昭和二十年（一九四五）三月に二回、五月に一回、油脂焼夷弾の空襲を受け

、名古屋の街は焼け野が原となってしまいました。

B29は必ず、真夜中に百数十機が編隊を組んで、日本軍の高射砲の弾が届かないように、飛行高度を一万メートルに保ちながら飛んできました。私達は、その機数が多く、なすすべもないまま、只映画でもみるように下から眺めていました。

真っ黒な真夜中の空に星のように輝いて見えたその白色の飛行機は、始めに照明弾を落し、地上を真昼のように明るくし、爆撃目標を確認してから、次に莫大な数の油脂焼夷弾を雨のように地上に落としたのでした。

『アッ〃この編隊が危ないぞ〃』誰言うとなく言った途端、サァーサァーと降り落ちて来た油脂焼夷弾は、目の前で十メートル位の間隔で地上に着弾し、信管により六角形の弾倉からゼリー状の油脂に着火し、火を噴き出して四方八方に飛び火した。

油脂弾は屋根瓦を破り、天井を突き貫いて部屋の四方八方を焼いたり、軒下や板塀に貼り付いて燃え上がり、又、人の服、顔、手にもねばり強く一旦体に付着したら大火傷に至るも火は消えてくれない。防空演習で教わった消火器具は役立たなかった。

戸口に設置した防火用水の水は寸時に底をつき、火災は益々拡がるばかりであった。人々は身の回りの貴重品のみを手に、火の無い安全な場所を求めて右往左往をするばかりで、自分の身を守るが精一杯であった。

私は最早これまで！　と思い、消火を諦め、火の少ない路を走り、生まれた時からお世話になった銭湯の前まで来ると、風呂屋の青木さん若夫婦が私に『燃えている家の中にお婆ちゃんがいる〃』と、血相を変えて伝えた。咄嗟に私は勝手口から居間の二階へ掛け上がり『お婆ちゃん、お婆ちゃん』と大声で呼び叫び、煙で見えない部屋を探し廻った。

高齢で目の見えないお婆ちゃんは仏壇の前で『お爺ちゃんの位牌を』と、念仏のようにつぶやきながら、探している姿がぼんやり見えた（あの声が無かったら私は、お婆ちゃんを見失っていただろう）早速そばに駆け寄って肩に背負い、階段を滑るようにして降り、火煙の中から路へ無事救出して、青木の若夫婦に渡した。

その数分後に風呂屋の外壁は燃え崩れ、棟木も燃え落ちてしまった。

周辺の家は一階建の長屋ばかりで立て込み、火炎が竜巻状の風を起して火勢は強くなるばかりで文字通りの修羅場と化し、大切な財産も街も一夜にして奪

って灰燼に帰してしまいました。

私は過ぎ去りし五十余年前に、このようにして火と戦いましたが、昨今の世界情勢を眺めて見ると、イラクを始め、中近東の国々でもこれと同じ争い事が現実に起きています。

全世界に永久な平和を一日も早く迎えられますよう、心から願って筆を止めます。

平成十六年五月五日（子どもの日）夜。

## 命を考えてください

小出　信子

母方の叔父は、私が小学校三年生の時に戦死した。戦死公報を持ってきた役場の人は、「天皇陛下の御為に名誉の戦死をされました。」と、まるで死んだことが偉いと言わんばかりの話しぶりだった。我が子の死んだ知らせに、母である祖母と姉である私の母は、丁重に応対して涙一つ見せなかった。私は『九人も子どもがいると、一人ぐらい死んでも悲しくないのかなあ』と、子ども心に思ったが、役場の人が帰ると家の中の音が外に洩れないように、雨戸を全部閉め、家中を暗くして、奥座敷の仏壇の前で大声で慟哭し、「むごい、戦争で死ぬなんて」と、絞り出すように言って泣き崩れていた。

戦死は天皇陛下のため、お国のために捧げた命だからと、人前では泣くことも涙を見せることも、恨み言も絶対言えない恐ろしい時代だった。

私は小学校三年生の夏に、山村の伯母の家へ一人で疎開した。最初の日、靴を履いて登校したが、靴を履いているのは私だけで、他の子は全員藁草履だったので、次の日から上履きも藁草履にし、暑い道を綿の入った防空頭巾をかぶり登校した。石鹸もない時代で、毎日汗をかいていたから子ども達全員に虱が発生して、私は父がやっと手に入れた水銀軟膏を送ってくれたが、干からびて使えなかった。

学校の先生は男の老人だったが、その内、お寺のお坊さんが先生になり、昼食前には「お経」を唱えてから、いただくのが日課になった。女の先生は蓄音

機の針が擦り切れて使えなくなったが、売っていないので私達にレコードを聴かせられないと悲しそうに言われた。私は疎開するとき母がレコードの針を持たしてくれたのを思い出し、先生に差し上げたら非常に喜んで下さった。

近所で、就学前の男の子二人が食中毒で急死した。医者も薬もなく、伝染病だと煮沸消毒で蔓延するのを防いだと聞いた。一番つらかったのは食べ物で、わずかな米が家族全員の一カ月分で、味噌、醤油、芋も配給で並んで買った。

冬は、母の縫ってくれた足袋やモンペで通学したが、長靴もなく、配給の下駄だった。二三歩歩くと歯の間に雪が詰まり、道路が凍ると滑って転んでばかりだった。素足に藁草履の子もいたが、戦争に勝つためだと、みんなで我慢して頑張った。

先生はいつも、「戦地の兵隊さんはお国のために、頑張っておられますから、どんな時も泣きごとを言わず我慢すれば、神の国ですから必ず勝ちます」といつも訓辞されていた。兵隊さんに送るため、桑の木の枝を池に浸してから皮を剥ぎ取り、乾燥して一貫目づつ供出するように学校で命令され、一生懸命やっても一貫目に達成せず、お友達に手伝ってもらった。

学校では運動場に並んで座り、稲束を槌で叩いて柔らかくしてから、縄を編んでこれも供出した。ワラビやゼンマイも蛇の多い山奥まで行って、取ってきて学校へ供出した。

戦争もますますひどくなり、父は町に残り、母と弟が疎開してきて、納屋を借りて一緒に住むようになった。母は村の人と一緒に松根掘りに汗を流した。松の切り株を掘り起す重労働で、戦いのための飛行機の燃料になる油を取るそうである。疲れていても行かないと「反日」の非国民にされるから、老若男女動ける者はみな勤労奉仕をした。

辛くて苦しい時代だったが、生き残るのに必死で、自殺する人は私の知る限りでは一人もいなかった。その点、戦争もなく食べ物も豊富な今、自殺する人が多いのはどうしてなのだろう。

「疎開もんが村に大勢来たで、わしらの食べるものが減る」と、子どもの私にも言ったが、今のような陰湿なイジメは受けなかった。

父の話は戦地の兵隊さんよりも凄かった。工場がB29で爆撃され、数百人が殺され、父は、死んだ人を手厚く葬るのでなく、死んだ人を早く片づけて、早く工場を稼動さすのだ。爆撃される危険な工場へ、徴用令で無理矢理働く人を連れてくるのだ。私は早くから疎開していたので、B29も焼夷弾も爆弾も父母から聞いただけだが、戦争は人の心を気狂いにさせてしまうのだと思った

戦争は武器もなく、無抵抗な人をも容赦せず、平気で殺してしまう。原子爆弾でどれだけ多くの人が死に、被爆の後遺症は今もずーっと続いている。憲法九条に守られ五十九年間平和が続いたが、それも危なくなってきた。もう一度あの戦争を振り返り、益のない争いは絶対やめるべきだと叫びたい。

私は、戦争体験者として、戦争の愚かさを若い人に伝える使命として、老骨に鞭打ち戦争を知らない人に伝えます。いかなる戦争にも反対して下さい。

そして、たった一つの命です、大切にして下さい。

# 目の前で校舎炎上

浅野　憲治

猿投山から銀色にピカピカ光る米軍機が飛来したかと思うと、真っ黒いピンポン玉大の焼夷弾をバラバラと落して去って行った。その一つが校舎に命中し、アッという間もなく校舎は全焼してしまった。昭和十九年十二月のことである。私たち児童は、空襲警報が鳴るとすぐに、学校近くの断崖に掘られた横穴の防空壕に避難していたから、全員無事であったが、校舎が焼け落ちるのを眺めながら、幼心にも「鬼畜米英」の決心を固めたものである。

名古屋市の近郊に残された最後の開拓地として、開拓農民には一戸当たり農地を一ヘクタール、宅地用として十アールの土地の配分があったが、見渡す限りの笹の原と灌木で、これを田圃と畑にするには大変な苦労があったと父や母から聞かされたものである。

戦時中は、その開拓も、ようやく終わりに近づき、食料増産のために役立つようになっていた。東春日井郡旭村と当時は呼ばれ、人口は一万人にも満たなかった。

校舎が空襲で全焼するまでは、空襲といえば名古屋市に限られていたから、私たち子どもたちは、夜空を赤く照らして燃えている名古屋の街を眺めながら、文字通り、火事場見物のような気持ちで、何か楽しい行事のようにワクワクしながら高台に登り見物していた。村は戦時中とはいいながら、比較的平和でのどかなものであった。先生たちが出征で、一人二人と、突然いなくなっても、その都度に組の分割合併があり、それも楽しくてならなかった。今度、いつ組替えがあるのか、心待ちにしていたものである。しかし、校舎が焼けてしま

ってからは、授業もなくなり、ようやく戦争というものがどういうものであるか、おぼろげながら分かってきた。

授業がなくなったクラスには、名古屋から疎開者が転校してくるようになり、軍需工場も移転して来るようになった。陶器関係の会社に勤めていた人たちも、強制的にそこで働くようになった。私たちは、ほとんど毎日、出征兵士の見送りや帰還兵の出迎え、軍事教練に明け暮れていた。特に、相撲は国技ということで盛んに行なわれていた。郡内の対抗試合も行なわれ、たいていは優勝していた。優勝したときは、優勝旗を先頭に意気揚々として行進して帰ってきたものである。

そのうち、開拓した農地が陸軍の演習場として徴収され、多くの開拓農民は、有無も言わせずに、その陸軍演習場の建設に徴用されてしまった。私の家の土地は、幸い計画の外にあったから徴収されずに済んだ。しかし、それから半年後、今度は飛行場を造るということで、開拓農地は全部徴収され、木の根を掘り起こし穴を埋め。大小様々な石を土の中から探し出し捨て、やっと農地にした開拓地を、軍の命令で今度はまた、飛行場にと石を敷きつめなければならない矛盾に苦しんでいた。

私たち小学生も高学年生は、日の丸の鉢巻きをして、勤労奉仕として名古屋から疎開してきた旭大隈という工場に小銃の弾丸を作るために働きに出た。低学年であった私は、農業報国隊として、出征兵士の家の田圃や畑を耕し、米や大豆や麦を作っていた。そして、空き地を利用した「報国農場」を学校は持っていて、そこにも国旗を先頭に行進して出かけて、食料の増産に協力していた。もう遊びの気分はなくなり、銃後の守りをするつもりで、子ども心にも、米英と戦争をしているつもりであった。だから、再建された校舎が工場に転用されたり、兵舎として利用されることになっても、口惜しいというより、誇りに思っていた。

飛行場が完成する前に終戦がやって来た。その日は、晴れだったか曇りだったかは思い出せないが、雨は降っていなかった。学校に集められ、玉音放送を聞いたが、何を言っているのか、さっぱり分からなかった。放送が終わり、何の説明もなく家に帰された。そこで初めて敗戦を知った。まだ、これから充分に戦うつもりでいたから、ガッカリしたのを覚えている。

戦後は、食料を買い出しに来る名古屋の人々を悲しみの目で眺める余裕があるほど、食料不足とは無縁で過ごせたのは、幸せだったのかもしれない。資料

を調べてみると、この小さな村でも二百六十四人の戦死者を出していることが分かる。そして、今、若者が我がもの顔で新車を飛ばして走る国道三六三号線が、未完のまま終わった飛行場の滑走路を転用したものであることを、どれほどの若者が知っているのか、複雑な思いで眺めている。

# 飛行機行進曲

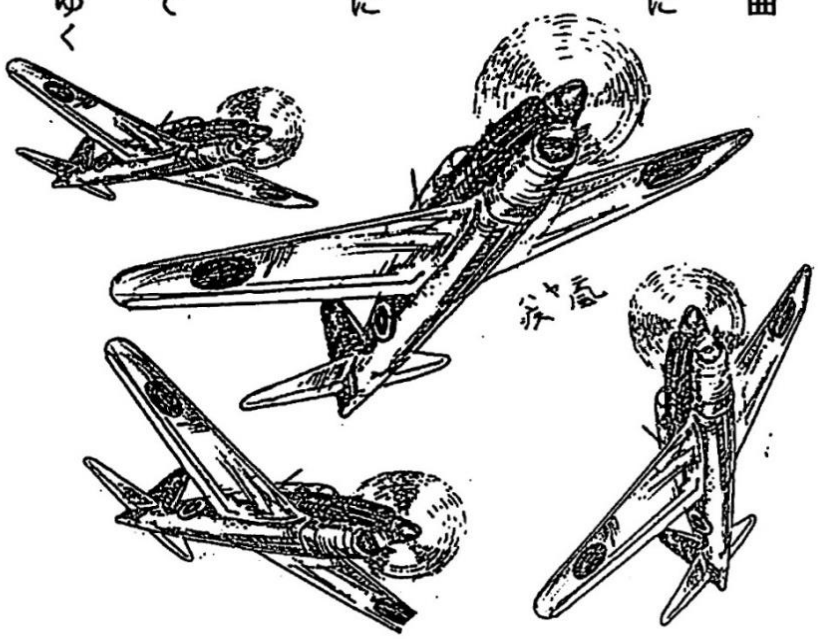
近藤　匡一

戦争に負けてから、毎年、師走の街にジングルベル、クリスマスの歌が流れると、私の胸に、戦争中の一つの出来事が、胸熱く彷彿と蘇ってまいります。

太平洋戦争が始まった年、私は昭和中学（現・昭和高校）の一年生でした。その頃、英語は鬼畜米英語、敵の言葉は使うなと乱暴な発想で、野球用語は日本語になり、音楽用語までも英語使用はきつく制限されていました。

そのような時代でしたが、学校の唱歌で習った「飛行機行進曲」という歌は何故か曲は♪オー・クリスマス・ツリー♪（日本訳＝樅の木）の曲に日本語の歌詞を当てはめた歌でした。

♪飛行機行進曲
遙かな　み空に
鳥かと見えし
雲間の飛行機
またたくひまに
爆音はげしく
頭上をよぎりて
やがては消えゆく
雲間のひびき



♪樅（もみ）の木
もみの木　もみの木
いつもみどりよ
もみの木　もみの木
いつもみどりよ
輝く夏の日
雪降る冬の日
もみの木　もみの木
いつもみどりよ

メロディーは讃美歌で美しいのと、私達男子生徒は少年航空兵に憧れていて、歌詞が飛行機のスピード感を現わしていたので、生徒の間で大流行をしていました。

昭和十六年（一九四一）太平洋戦争開戦後、間もなく、香港やシンガポールが陥落した時に、日本軍に投降したイギリス連邦極東方面軍の将兵捕虜約二百名が、名鉄本線有松駅近くの丘陵地に在る捕虜収容所にいて、日本車両鳴海工場に敵国の労働力として、働かされていました。

一方、私達学生は勤労動員学徒として、鳴海町伝治山の住友軽金属鳴海工場で海軍の戦闘機「紫電改」のエンジン部品を作っていました。

イギリス捕虜と私達の働く工場が距離的に近かったので、早朝や夕方に日本車両鳴海工場へ向かう、イギリス捕虜の行進によく出逢いました。彼等は、国際法上、また人道上、捕虜としての正当な保護を受け、鬼畜米英の敵国兵であるので、憎っくき奴と日本人が殴る、蹴る、石を投げるので、憲兵が厳重にガードして憲兵の保護下で、整然と隊伍を組み、元気よく胸を張って行進し、イギリス連邦軍のプライドを表面に出して、自由を剥奪された捕虜の処遇に耐えているようでした。

私達は、「飛行機行進曲」の曲が、♪オー・クリスマス・ツリー♪であると知っていたので、行進しているイギリス連邦軍捕虜に届けとばかり、日本語の歌詞で生徒一同大声で歌いました。憲兵がいて近寄ることは勿論、会話も出来ないのですが、憲兵は日本の歌と思っているようで検問にもあわず、風に乗ってイギリス捕虜の耳にしっかりと届きました。

虜らわれ遠く異国の地へ運ばれ、自由を剥奪された捕虜の耳に、懐かしいふるさとの♪オー！クリスマス・ツリー♪の讃美歌のメロディーが、いがぐり頭の日本人少年からプレゼントされたのでした。

厳重な日本軍憲兵の監視の下。会話も許されず、棘の鉄条網越しに隔離されているのに、声は届けることができるのです。「飛行機行進曲」の大合唱を始めると、イギリス連邦軍の兵士の顔が輝き、歩調を揃え堂々と行進する姿で私達に、ありがとうの気持ちを現わしてくれるようになり、私達は無言の中で心と心が通い合った気持ちを確認しました。

あの狂気の時代から早や六十年の歳月が過ぎました。クリスマスに近い日の午後、東山植物園で、娘さんを一人連れたロマンス・グレーのイギリス人大学教授ご夫婦にお会いしました。互に自己紹介の後、私は、私達中学一年生が厳しい思想統制の監視下で、イギリス連邦軍捕虜を歌で励ました「飛行機行進曲」

の話をしました。ご家族は深い感銘に打たれ、私の話を一言も洩らすまいと、真剣な表情で聴いて下さいました。

話し終えた私は、敵と味方に別れた戦争の悪夢時代の重荷が、いっぺんに下りた気がしました。ご家族から是非と所望され、私は日本語で♪飛行機行進曲♪を歌い、次いで四人で♪オー・クリスマス・ツリー♪をアカペラで合唱し、思わず懐旧の念交々と、昔のよき友の紅顔笑顔が次から次へと蘇り、涙があふれて止まりませんでした。

このエピソードは、ご家族からロンドンの新聞社に紹介され、クリスマス新聞でロンドン市民に発表されたと、お礼状と共に教授から便りがありました。

追記

英軍捕虜との出会いは、私の中学一・二年生でした。三年生になった時、鬼畜米英をやっつけるため軍人になろうと、海軍に志願しました。配属は呉。戦争末期の呉軍港大空襲を体験し、連合艦隊の壊滅的断末魔の決戦場に叩き込まれるなど、

次いで、八月六日の広島原爆の日には、至近弾で生死の界を！。それでも私は、今、生きています。平和の有難味をしみじみと感じて、平和を護ることの難しさもしみじみと実感しています。

# 私の戦争体験

広田　武司

私の生れは昭和十年（一九三五）六十九歳になる。日本は私が生まれる前から戦争をしていた。日本軍は昭和三年（一九二八）軍閥張作霖大元帥を走行中の列車毎爆殺し、一般市民を巻込み平然とするなど、横暴な限りを繰返した。近現代史の歴史家が十五年戦争、即ち第二次世界大戦の導火線は、昭和六年日本軍が自作自演で行なった鉄道爆破を、中国軍の仕業と武力行使で満州を占領し、傀儡政府を樹立した満州事変と定義付たのである。傀儡政府樹立を世界が非難すると、昭和七年（一九三二）上海へ目をそらす目的で、買収した中国人に日本人僧侶を殺させ、僧侶を殺したと因縁を付け上海事変に発展させ、国内向け戦意高揚に「爆弾三勇士」を創作発表し「爆弾三勇士の歌」や「銅像」まで作ってしまった。

このように、私が母の胎内に宿る前から日本はきな臭い国であった。

昭和十二年（一九三七）私が二歳の時、日本軍は中国を刺激する軍事演習を行ない、遂に、中国軍と銃撃戦を始め、今までの事変扱いを拡大させ、日中戦争としてしまった。

昭和十六年（一九四一）の冬、私は風邪をこじらせて、母に連れられ大学病院へ行った。待合室の患者達の様子がおかしい。私の手を引いている母の顔を見上げると、これまた険しい目をしている。「武ちゃん、中国だけでは足らんと日本はとうとうアメリカやイギリスとも戦争を始めたのよ」母のあの厳しい目は戦争を憎み恐れる、十二月八日の眼であったのだ。私は次の年の四月、国民学校と呼ばれた小学校に入学し、四年生の夏、敗戦を迎えた。この児童期の物質的にも精神的にも強い影響を受けた私の戦争体験を振り返ってみたい。

## 名古屋での戦争体験

小学一年生の時（昭和十七年）四月、名古屋に始めての空襲があった。道端の防空壕に逃げ込んで、不気味に響くサイレンに耳を傾けたり、防火用水の水を汲んで、消火訓練に参加したりの体験が始まった。Ｂ２９の爆音におののきながら、黒い布で覆われた暗い電球の下で眠ったのもこの頃である。枕元には非常持ち出し物が入ったカバンが常に置いてあった。近所の家の男の人が出征して行くのを見送る光景が見られるようになった。新しい軍服を着たおじさん達が、真面目な顔で敬礼し、女の人達が目に涙をためて千人針を縫っていたのが思い出される。

街のあちこちに「突け米英の心臓を！」などという看板が立てられ、その横で女の人達が竹槍の訓練をする姿、子ども心にもこっけいに思われた。しかしその頃は、戦争の意味を考えたり、疑いを持ったりする才覚は無く、「日本は神国であり、いざとなれば神風が吹いて必ず勝つ」と信じていた。

## 疎開先での戦争体験

昭和十九年（一九四四）の春。私と二番目の姉は静岡県の浜名湖の近くの町へ疎開した。空襲を避けて行ったはずのその町に海兵団があったので、アメリカ軍の艦砲射撃や、艦載機の機銃掃射を受ける羽目になった。昭和二十年（一九四五）敗戦間近になった頃、空襲が頻繁になった。警報が発令されると、学校に居る児童達は帰宅させられた。防空頭巾をかぶって家に向かっていると、すでに頭上に敵機が飛来していた。見上げると編隊を組んだ機体から爆弾が落下し始めていた。機体と平行に離れた爆弾は、次第に垂直方向に角度を変えて落ちて来た。このとき、ザーッという風のような音が聞こえ、轟音が轟いてあたりの家が振動した。目と耳を両手でおさえて地上にうつぶせになる。暫くして、「助かった」と思いながら立ち上がった、ザーッという音が聞こえた時は

助かるのだそうだ。
ある時、このようにして空襲にきた敵機が日本の砲撃によって墜落炎上したことがあった。未明のことだったので閃光と黒煙の上がる様はすさまじかった。乗組員の墓が十基ほど現地に建てられた。私はその中に眠るアメリカ兵の顔を頭に描いた。近所の子どもの一人が、その墓に向けて小便をするのを見て、何とも言えない悲しみにおそわれた。

敗戦の日

昭和二十年（一九四五）八月十五日、天皇の玉音放送を、聞き取りにくいラジオの回りに集まって聞いた。じりじりと太陽の照りつける正午頃であった。不思議な気持ちであった。近くの寺に寄宿していた海軍将校が、「俺は最後まで戦う」といって、軍刀をふりかざす姿を奇異なものとして眺めた。このころから私は考え込むようになった。

「戦争とは何か」「日本はなぜ戦争をしたのか」「いったい何が正しいのか」学校では、歴史の教科書のあちらこちらを墨で塗りつぶす日が続いた。《鬼畜米英》《報国愛国》《滅私奉公》などという言葉を信じていた私だったが……。《自由》《平等》《民主主義》という言葉がきかれるようになり、私はとまどった。

私の戦争観

私は戦争に対して過剰な反応をするようになった。青年期になると、戦没学生の手記「きけわだつみのこえ」を涙ながらに読んだり、「良心的兵役拒否の思想」という本を強い共感をもって読んだりした。《不戦兵士の会》という組織に加わったりもした。

こういった反戦の思想、行動の基盤は、小学校時代の戦争体験によって培われたと思う。すべての日本人が何らかの形で戦争の影響を受けた。私も例外ではない。戦中派に属する私は敗戦を境に、百八十度転換した社会に適応するのに苦労したが、残る人生を、戦争のない世界実現のために少しでも役立つて行きたいと思う。

昭和二十年八月十五日、ながかった戦争は日本の敗戦でようやく終りました。B29の空襲も、太平洋方面の戦場も、中国大陸での戦いも終わり、静かになり平和を取り戻しました。

日本が、そして世界が平和になってから、満州やシベリアでは日本人の苦難が始まりました。いまだに何万人死んだかは不明のままです。これは『ヒロシマ』『ナガサキ』に継ぐ戦争悲劇です。その一つ《黒河事件》を紹介します。

# 黒河事件に巻き込まれる

西向　克巳

♭あちらの岸はソビエィト　赤い狐が刃向かえば　僕は得意の狙い撃ち♭

このような鼻歌を歌っていた、愛琿（アイゴン）第六国境守備隊の任務は、全員玉砕してでもソ連軍を三時間だけ食止める至上命令であった。この三時間で南満州の関東軍が戦闘体制を完備する、私達はその捨石戦闘部隊であった。

八月二十一日。ソ連軍将校が大きな白旗を高く振りながら陣地に来た。私達はソ連が降伏した、天皇陛下万歳を三唱し、激戦の苦しみを讃えあった。

ソ連軍将校は、我々に日本の敗戦を告げ知らせにきた軍使だったのだ。ミカド（天皇）は十五日、降伏したとラジオで全世界に宣言した。アイゴンスキー（私達第六国境守備隊のこと）は勇敢だったたから、特別扱いで弾薬は没収するが、軍刀、小銃、拳銃を携帯し、軍隊の軍装のまま日本へ帰す。と、降伏の条件を提示した。この条件は将校、特に職業軍人を喜ばせた。

天皇の降伏で天皇の軍隊皇軍は降伏した。が、私の『戦時体験』を書けと言ってきた橋詰氏や何人かは「赤い狐に騙されるな、捕虜になれば家族が村八分になるぞ」と、その夜降伏を拒否し武器を持って出ていった。一発の銃声も聞こえなかったから、ソ連軍の前線を擦り抜けたようだ。翌日弾薬を放棄し陣地から数キロ離れた徒溝子で、軍刀、小銃、拳銃を没収され完全に武装解除された。これが嘘つきソ連の始まりだった。ソ連は、シベリア経由で（トウキョウダモイ）日本へ帰すからと、黒河から対岸のソ連領ブラゴエチェンスクに入った。この日、九月の始め、前途の不安を暗示するかのように、拳大の雹に叩き付けられた。

両側にソ連監視兵が配置され、広い馬鈴薯畑で芋掘りをし、一日分の食料に馬鈴薯を五、六個を貰い、野宿を繰返し、歩いては馬鈴薯掘り、夜は氷点下の野宿。夏服と馬鈴薯だけで栄養失調や体調不良が激増し、朝目覚めると何人か死んでいる、歩くことの出来ぬ者はそこが野垂れ死にする墓場になった。「満洲から真っ直ぐ日本に帰せばよいのに」と、誰もが思った。すると物知りが「ソ連領から帰すと賠償金が多く取れるから」と。ソ連の金儲けかと毒ついた。

一カ月野宿をしながら芋掘りをして、囚人と一緒に働くアロチカ炭坑に着き、ここで「赤い狐」に騙されたと気がつき、ソ連兵を殺した戦闘部隊への報復処置と怒り心頭に発し、「賠償金が」と言った、したり顔の奴を殺したいほど憎むようになった。

着替も、石鹸も、入浴もない。衛生面ゼロ、虱が大発生し、十二月に発疹チフスに罹り血便を垂れ流し、意識を無くしたようだ。幸い両側の人が、私の鼻

の下に指を当て、まだ生きていると死者扱いに抗議してくれたと言う。九死に一生を得て、命はとりとめたものの、耳は遠くなり、足もふらふらだった。何が何だか訳の判らぬまま二月十八日、トラックの荷台に放り込まれ、結氷した黒龍江を渡り黒河の光複軍（中国国軍）轄下の収容所に放り出された。ソ連は病気で働けなくなった日本兵を、治療せず邪魔もの扱いで放り出す国なのだ。

黒河はソ連で働けなくなった病弱者が多く、徒歩で追放された者の多くは黒河に辿り着く前に行路死したと証言していた。死にかけた病人ばかりで、毎日毎日逆送兵士の中から幾人もの死者が出ていた。死体を橇に積んで凍った道路を、少し元気な者が引っ張って郊外へ捨てに行った。付添いも世話する人もいない、誰もかまってくれない、何処の誰か名前も判らないゴミ扱いであった。日本では家族が陰膳を供え無事を祈っているのに、家族の祈りが届かない地獄にいるのだと思った。

黒河の街にも日射しが緩んできた三月、ラッパを吹き鳴らしながら、弾帯を肩にかけた共産八路軍の一隊が入城してきた。今の今まで収容所の監視をしていた光複軍の兵士達は、クモの子を散らすように逃げてしまった。機を見るに敏なる彼らの、生きる秘訣を見たような気がした。

当時黒河には約二〇〇〇人の日本人がいた。ソ連は自国の戦後復興に労働力として日本人七十万人をシベリアへ連行したが、大勢の死者と病人が出て、ソ連は病気で使えない者を黒河に追放し、黒河の日本人は気候が暖かくなるに従い、ソ連からの追放者で膨れ上がった。八路軍は収容所の収容能力調整のためか、日本人の移送をはじめ、三月末に一〇〇〇余名を第一梯団。四月はじめ一五〇〇余名を第二梯団として北安へ向かわせた。この第二梯団に私が入れてもらえ日本へ向かって黒河を後にしたのである。

※ここで当時を説明しよう。戦争が終わり一年になろうとするのに、黒河のある黒龍江省は、日本の降伏拒否軍、光複軍、八路軍、これにオロチョン族と四卍の交戦場であり、それぞれが相手の武器、食料、物資を奪い合う争いをしていた。また松花江をはさんで南は中国国軍、北は八路軍の勢力下でもあった。黒河～北安間は三百四キロメートルの鉄道があったが、ソ連は引き上げるとき黒河～北安間の線路と枕木を、日本兵捕虜に剥がさせ略奪し、線路は第二シベリア鉄道（バム鉄道）を捕虜に建設させ、枕木一本に日本人一人の命が費やされ、枕木は暖房用燃料にした。従って、ソ連で使い者にならないと診断され追放された病人は、北安まで三百四キロメートルを歩くのである。※

昭和二十一年四月始め、第二梯団一五〇〇名の一人として私は北安と、その彼方にある祖国日本へ向け第一歩を踏み出した。しかし体力的に集団と行動を

共にすることは困難で、一日遅れ、二日遅れては集落近くの馬糧乾草の中へ潜り込んで寝た。少量の粟粥を炊いて流し込み、二キロ歩いては三十分休み、牛歩のような歩みでいつも独りぼっちで、とうとう粟も食べ尽くしてしまった。

今晩、遂に物乞いをしなくては明日の歩行ができない。集落は危ないと思い離れた一軒家を選んで深夜に戸を叩いた。農夫らしい中年男にあっさり断られたが、奥さんらしき女性に粟を恵んで貰った。驚くほど袋一杯に粟を入れて下さり、渡すとき「兵隊さんお願い連れて行って下さい」と日本語で言われた。女性は臨月近く三百キロを歩ける姿ではなかった。農夫は「日本人は頭が良いのでお腹の子に教育を受けさせ、偉人に育て、俺達夫婦の老後は楽ができる」と。なんと四十年、五十年先の遠大な計画にさすが中国人と驚いた。

女性は山形県人の開拓団で、敗戦と同時に開拓団が襲撃殺された時、この農夫に助けられたというのだ。私は自分一人歩くが精一杯の現実を伝え、あなたを助けて歩くことは出来ないと断ったが「逃げ」の姿勢かと自問し辛かった。

夜になると無性に火が恋しかった。焚火を頼っては仲間入りをさせて貰い、朝になると一人か二人は死んでいた。どこの誰かなど全く判らない。身分が判るものは誰も身に付けていない。この私もそうだ。誠に申し訳ないが死者の持ち物は生き残った者に役立ち、死体はその場に置き去りの相矛盾することだが致し方がないことだった。

気の遠くなるほど長い丘陵の道を独りとぼとぼと歩く、前後数キロの視野には人影もない。梯団の先頭は、そして最後尾は俺かと思うようになってきた。緩やかな丘を越えると視界が広がり、数百メートル前方に一人寝ている姿が目に入る、更にその先に野火が見える。野火は猛烈な勢いで大きくなりこちらへ向かってくる。寝ている人に危険を知らせなければと思うも、大声も出せないし早く歩けない。火は寝ている人を包んで通り過ぎた。頭髪は全部燃え、地肌は墨を塗ったようになり、軍服からは小さな炎が上がり燻っている。死んでから焼かれたのか、焼かれて死んだのかは判らない。俺と同じ落伍者の一人だ。極限の崖っ淵の激動に翻弄されているのだ。

黒河を出て一週間もかかりやっと孫呉に辿り着いた。黒河～孫呉間は七十キロだから、一日たった十キロしか歩いていない、いや違う歩けなかったのだ。

孫呉は日本軍の要衝で師団司令部や陸軍病院も備えた軍都で、私は公用出張でよく来ていたので知り尽くしている街である。夜を待ち、焚火を目標に火と人が恋しく行くことにした。第二梯団の遅れ組で粟粥を啜っていた、「私にも一啜りの粥を恵んで下さい」死にかけの病兵でも物乞いは羞恥心で声にならない。「死ぬような奴に粥など勿体なくてやれるか。どこかへ失せろ」これが生死を共に戦った戦友からの返事だった。

食べ物の無い人が、食べ物を持っている人に、食べさしてと言うのは悪であり、罪悪なのだろうか。私は野垂れ死は、奴の目に触れない場所にしようと思った。死んでも絶対奴に私の衣服、靴など身ぐるみ裸にされてたまるかと思い、中国人と食料の交換品にはさせぬと身震いして怒れてきた。みんな禿鷹のような生き方をしていたのであった。

黒河を出てから屋根の下で寝たことがないので、死ぬなら屋根の下と第二陸軍病院跡で一夜を明かすことにした。焚火をして暖をとっていると、八路軍兵士が巡回してきた。畑荒らしが多いので犯人を探しているというのだ。私は梯団と一緒に日本に帰ることをあきらめ、兵士に流暢な中国語で「食べ物がありませんから仕事を下さい」と、頼んだ。巡回の長らしい兵士が、会話のできる奴を探していたと八路軍自動車隊の炊事で働くことになった。

天は吾を見捨てずであった。私は自分の体にあった食事を自分で調理した。栄養価のあると思う食材を選んで、少量だが柔らかく調理し、胃腸を驚かさないように薬と思って食べた。ここで体力を回復し、体調を整えるのが天からの授かりだと一生懸命働き、炊事の中国人より字は読めるし計算も出来るので重宝がられた。そこで更に信頼を高めようと、炊事で働く中国人二人が食料の横流しをしているので幹部に、よく働く日本兵を二人探してくるからと交代させた。私と同じように落伍し食べ物のない連中がさまよっていた。「屋根つき・食事つき・寝具つき」で誘い、軍隊の階級よりボスは俺と判らすために「命令者は俺」を条件にした。私達三人は恩義としてよく働き、炊事場や食器類をピカピカに磨き上げ清潔な職場に変身させ、中共軍兵士を驚かせた。これは日本人は自分が働く職場の整理整頓、潔癖性がそうさせたと思う。そして体力を回復させ三人力を合わせて日本へ向け逃亡する計画を話し、冬の来る前には朝鮮へ辿り着けるように話し合うのが楽しくなっていた。

ここ孫呉では光複軍と八路軍の小競り合いが続いていた。六月の終り頃、北安から急派されてきた八路軍の幹部将校が、この自動車隊で車を交換して黒河へ慌ただしく出発していった。車を交換するあいだ炊事でお茶を出すことになった。この付近にはいない相当偉い人物だと雰囲気で判った。隊長との会話では、黒河に収容されている一〇〇〇人以上の日本兵が、我々の番兵八人を殴り殺し逃げた。《これが後に黒河事件と呼ばれるようになった》

我々は逃げた日本兵を捕えるのだが、逃げない日本兵まで手引者として殺している。毛首領はこれ以上日本兵を殺すな、殺された日本兵の子が、殺した中国人の子を親の仇と殺し際限が無い。殺しあいを無くするために中国人は我慢せよの命令で、殺しに待ったをかけに行くと言うのだ。《この証言は黒河事件を調査している連中を驚かせた。黒河事件で少数だが生き残った人々は、北安

から日本人を殺すなと伝令が来て、助かったと証言していたからである。》
私は、大変なことになったと身震いしたが、そ知らぬ顔で日本兵の身辺が急に慌しくなり、危険が迫っているように感じ、会話の理解出来ない二人には真相を話さず、我々はおとなしくしているのが一番だと伝えた。

※ここで橋詰達が調べた《黒河事件》の概況を説明しよう。
ソ連は戦争で国力が疲弊し収容、管理、流通能力が低下し無力なのに七十万人の日本人を労働力として抑留し、酷寒・飢餓・重労働でやみくもに働けと銃口を向け、抑留一カ月で日本兵の多くは栄養失調に陥った。十一月には黒龍江は結氷する。ソ連領江岸で日本兵がバールで穴を開け死体を流し込む光景が黒河側から丸見え、多い日は六十体を越えたと証言者がいる。年が明け、昭和二十一年に入るとソ連は、労働力にならない病弱日本兵を日本へ帰さず、徒歩とトラックで一方的に黒河に置き去りにした。満州は日本の降伏後政情が悪化し、国民同士が交戦する国で治安は皆無の戦場であった。黒河を支配していた中国国民党光複軍は、黒河の旧満鉄の官舎と寮を南崗収容所と命名し病弱日本兵約千五百名を収容した。この頃の死者は一日二十八～三十人と証言した者がいる。三月、光複軍は八路軍に破れ、黒河は八路軍の支配下になった。八路軍は一方的に送り込んでくる病弱日本兵の収容に日本統治下の警察訓練所、日本商社木材倉庫を江岸収容所とし千三百～千五百人を収容し、更に日本統治時代の陸軍、一般病院は廊下にも収容し、廊下で死ぬ有様で、持主のいなくなった「つたや旅館」を第二病院とした。
八路軍はソ連からの逆送に対応しきれず三月二十八日、千二百名を第一梯団として日本へ向け南下させた。北安到着一番は四月十二日。第一梯団は約八百名が到着し、残余約四百名は行き倒れ、落伍、逃走者で処理。第二梯団は四月四日、千五百二十二名で出発、北安到着は四月十七日。梯団中約三百余名が行方不明者になっている。梯団はハルピンを目指し更に南下したが、松花江南岸からは中国国軍の統治で、日本兵の受入れを拒否。理由は、ソ連は引き揚げるとき、南満州の穀倉地帯の昭和二十年秋の収穫物は勿論、家畜の餌まで食べられる物は根こそぎ略奪し、現在は無政府と同じで流通も悪く大都市は飢餓状態。又、八路軍側にも、中国軍に渡せば武器を与え敵になるから渡すなと意見もあり、松花江北岸で第一梯団、第二梯団が合流し足止め状態になっていた。
一方、黒河の収容所ではそのような状況は判らず、第一梯団は三月、第二梯団は四月始め出発し、残留者は心をはずませ長坂中尉を団長に第三梯団を結成したが、六月になっても出発の動きも噂も出ない有様で、何かあると不安が先行し始めた。又、同行した八路軍兵士の誰一人も帰ってこないので、本当は鶴崗炭坑へ連れていったのだ、八路軍兵士を帰すと兵士から真相が漏れるからだと、誠しやかな噂が真実味になり不安に拍車をかけた。とにかくシベリアでソ

連に騙されつづけられた逆送兵達は疑心暗鬼に陥っていた。

更に、第二梯団出発後、中共軍は残留者の健康者から収容所外に宿泊させ左記の部署に流用したため、残留者は帰して貰えない事例にした。

中共軍軍司令部二十名。清掃隊三十名。消防隊二十～三十名。発電所三名。白酒工場十名。平和病院七名（軍医・衛生兵）。中共軍副官所三十名。愛琿電柱工業所三十名。愛琿架橋作業所十六名。商店及農家三十名。孫呉自動車隊整備工四名。以上の部署者は《黒河事件》後黒河に集められ、黒河に残留していた日本兵と一緒に毎日、二十名、三十名と銃殺刑か五人づつ後ろ手に針金で縛られ黒龍江に流されたと、残留組の生存帰国者は証言している。

六月十日頃、黒河八路軍の手薄な個所を光複軍が攻撃し大打撃を与え逃走した。光複軍戦死者の中に日本兵がいて中共軍が調査したら、愛琿清掃隊に派遣した三十人の逆送日本兵の一人で、なんと三十人は引率者の中共軍将校を殺し全員が光複軍に加担していると判明した。八路軍は収容所の日本兵が内通していると疑い、連日連夜厳しい取調を繰り返し、遂に銃殺刑にされた者も出た。疑心暗鬼に陥った残留者達はいつ帰国出来るかの希望も見通しもなくなる中で、誰一人二度目の冬を越す自信もなく、冬までに日本へ辿り着きたい願望にかられ。自然発生的に秋迄に朝鮮に辿り着くためには今、六月中に出発しなければと密かに計画をたて、六月二十日深夜〇時を脱走時間と決め実行した。※

黒河がこのような状況下にあるとは知らない私達三人は炊事場に腰を据え、よく働きよく食べて体力の回復に全力を注ぎ、三カ月が過ぎ八月末に逃亡と決め準備に入っていた。毛布で背負い袋を作り、ピンハネした食料で買収した家に食料を貯蔵し。八月二十五日消灯後、丈夫な体にしてくれて有り難うと、感謝の気持ちで三人はネコババした食料を担ぎ逃亡した。逃亡がバレルのは明日の朝、朝食が出来ていないからと思うと、生死を賭けた悲壮感もなく、油断もせず「飼犬が手を噛んで出て行く」軽い気持ちが間違いであった。

ソ連軍が略奪し線路と枕木のない砂利跡を北安へ向け、六キロ行軍（一時間に歩く距離）八キロ行軍の歩幅で元気よく足並みも軽く歩いた。清渓を夜中に通り辰清の手前で夜が明け、我々は驚くほど距離を延ばしているのに自信を高め、逃亡計画の完璧さに自己満足していた。突然背後から軽機関銃の銃撃を受け、両側は湿地帯なので、三人は咄嗟にそれぞれが一瞬安全と思う処へ飛び込むように隠れ、私はその先の小川まで匍って行きドロ柳の根株へ移動し、身を曲げて息を殺し難を避けた。追手はトラック二台で、小銃と軽機関銃で十五分ほど乱射した。私は、顔見知りを殺しに来た気持ちはなどと考えていた。後は我々に降伏を呼びかけ一時間ほどして引き揚げていった。

この乱射で一人が頭を打ち貫かれ即死。川から這い上がった二人は粟も水に

濡らし、塩も水に溶けて食料を一瞬になくしてしまった。道は歩けず小興安嶺の山に入り、周囲を警戒しながら花と球根で飢えを凌ぎ龍門を目指したが、私の靴底が剥がれてしまい、何キロか素足で歩いたが筋肉が露出し血が流れ、歩ける状態ではなくなった。限界を察した私は彼に別れを告げ残ることにした。

足を布で覆い引き摺るように歩き、野菜畑があり人家が近いと判った。畑には茄子、胡瓜が成熟しかかっていた。これを餓鬼のように手当り次第口へ放り込んだ。美味しかった。と、一匹の野犬が吠え始め、野犬は見るまに数匹になり吠え立てた。歩けないから逃げることも出来ない。とうとう満州の曠野で野犬に食い殺されるのかと観念した。人影がしたかと思ったら銃声がし、野犬は飛び散るように逃げていった。ホッとする間もなく私は簡単に逮捕され、次の目的地とした龍門の留置場に入れられた。牢獄で一夜を明かすかと度胸を決めたが、寝かされることなく激しい尋問と拷問が延々と続けられた。彼等同士の会話を想像すると、六月黒河で八路軍の番兵を殴り殺した奴等が現れる頃だと言うのだ。私は自動車隊炊事場で「殺しを止める」八路軍高級将校の話を思い出した。拷問は日本軍のお家芸で多種多様あり中国人を苦しめてきた。私は死なない程度の拷問だが殺されるかと思うほどきつく、唸り、もがく度に「殺せ」「殺せ」と呻いていた。殴られ蹴り上げられ鞭でしごかれるが黒河事件そのもを知らないから答えようがない。かと言って六月は自動車隊炊事で働いていたと言えば、黒河事件の疑いは取れるが、中共軍の信義を裏切り、大切な食料横領、窃盗罪で銃殺は間違いないと思う。正直に黒河を四月に出発した第二梯団の一人と言うも、今は九月だぞ今頃居るわけがない嘘だと信用しないのだ。朝まで一睡もせず尋問と拷問がつづき、ここが墓場と観念した途端、すーっと体の痛みが引いていく錯覚に陥った。

どれぐらい時間が経過したか判らぬが裏庭に引き摺り出された。庭に大きな穴が掘られアンペラの上に死体が一体横たわっていた。私はこの人と一緒に埋められるのかと思い、私と一緒に埋められるこの人はどうゆう人か知る権利があると言うと、昨日農家に押し入り農夫を撲殺し、農婦を脅し金品と食料を強奪し食事を作らせ、たらふく食べてから農婦に傷を負わせ逃げたと言うのだ、知っている奴か顔をよく見ろと言うのだ、銃殺刑で眉間に一発顔が半分潰れて、苦しまずに死んでいた。なんと二日前に別れた人だ私は知らないと言い切った。私は殺されも埋められもせず留置場に戻された。私を脅して本当のことを聞き出そうとした精神的心理的拷問だったのだ。が、本当のことは第二梯団だけしか言えない。それでもここに一週間留置され拷問、尋問を繰り返し受けていたがトラックに乗せられ、北安監獄へ移送された。

目的地北安へは囚人として到着した、なんと皮肉なことであろう。取調もなく来る日も来る日も、中国人囚人と足枷（かせ）を懸けられ街の清掃をさせられた。足枷とは二人三脚の紐で縛らず、一枚板に穴が二つあり、そこへ足を入れるのである。二週間ぐらいした日であった。一団の日本人とすれ違った。その中に第六国境守備隊歩兵一中隊の南部さんを見つけた。思わず大声で「南部さん助けてください。北安監獄にいます」と、叫んだ。二日後「出ていけ」この一言で監獄を出され、南部さん達と一緒に日本に帰れた。

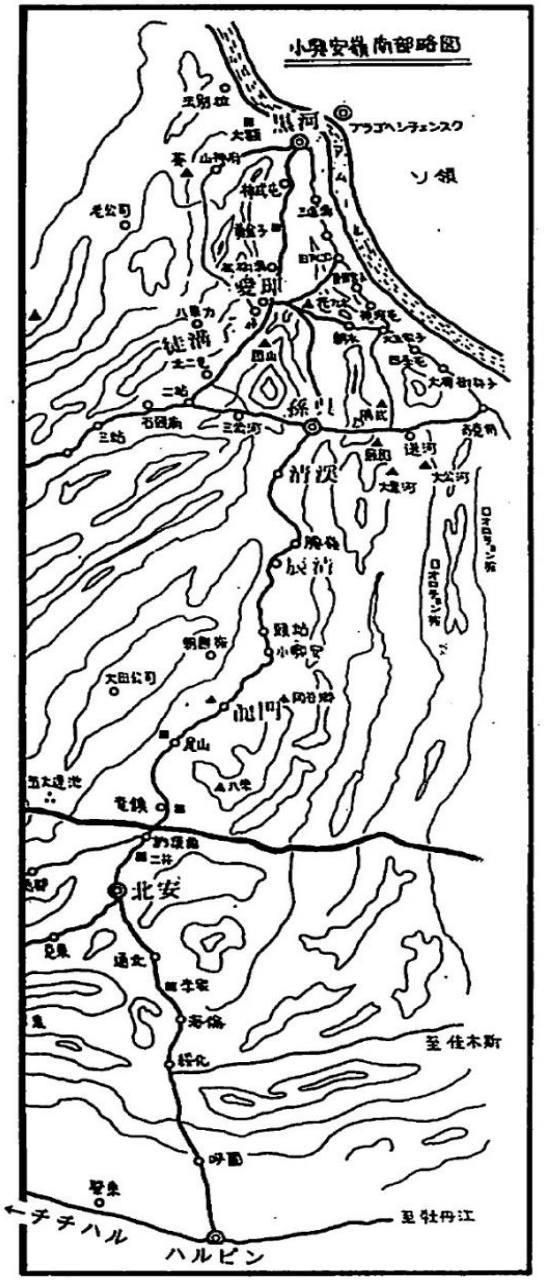
南部さんは三重県鈴鹿市へ、私は神戸市にそれぞれ病弱のまま帰りました。

思えば長い、ほんとうに長い紆余曲折の道程だった。生と死は紙一重というが、死ななかったのが不思議。日ソ戦以来死に直面すること数十回、遂に死ななかった。どうゆう巡り合わせ、生と死の境目とはどうゆう意味合いなのかも。第六国境守備隊という強い兵団の中で鍛えられた不屈の精神が、陰に日向に働いてくれたと信じたい。

圧倒的多数の評論家は、腰抜け関東軍、張子の虎関東軍と味噌糞にけなし、厳しく弾劾しているが、「極東の勝利」を刊行したソ連は、アイゴンスキーは関東軍最強の軍隊で、ヨーロッパのドイツ軍とは比較に出来ないと記述している。日本でも一人、軍記作家伊藤桂一は、関東軍の中でも最後の最後まで関東軍の名を辱しめなかった屈強不屈の第六国境守備隊を「讃たり！」と評価している。

最後に戦友橋詰が言った、平和を求める謎めいた言葉をご披露しょう。俺達は訓練で、世界一の殺人技術を身に付けさせられた。平和の時どのように生きればよいのだろか。と。皆さんも捜し考えて下さい。私も探しているから。

■義勇軍訓練所　▲開拓団




黒河事件　逆送、脱走、残留者の辿った道

# 黒河事件今も忘れじあの苦闘

上村喜代蔵

①ソ連から日本へ帰すとシベリアへ連行され強制労働。昭和二十一年三月栄養失調でシベリアから黒河へ逆送され、五月頃体力が回復し、南崗収容所で黒河事件発生の一カ月位前より、西崗子に寝泊まりして毎日、北鎮台へ我々の隠し埋めた武器弾薬を発掘し、八路軍に渡すため八路軍将校監視下で中国人と一緒に発掘作業をしていた。ここは日ソ戦激戦地で、戦死して一年近くも放置された死体の埋葬もした。何処の誰れかは不明であるしソ連兵の死体もあった。

②黒河事件の起きる少し前、作業の帰り道、西崗子の前慰安所手前の橋の上で、①の八路軍将校を皆で殺し、日本へ帰すという光複軍（中国国軍）に寝返った。

③昭和二十一年六月二十一日早朝、多数の元日本兵が息せき切らして西崗子に逃げてくるので、事情を聞くと。収容所の監視兵八名を棍棒で殴り殺し、黒河の収容所を破り逃げ、日本に向かうと言う。君達も仲間と間違えられるから直ぐ逃げろと言うので、中国人と一緒に西崗子から西溝方面の山中に隠れた。この時の光複軍隊長「李」は、二站方面の出身らしく二站まで逃げた。

④山中で暫く馬賊生活を中国人としていたが、隊長「李」は八路軍に投降してしまい、又、一緒にいた田中軍曹も「李」と八路軍に行く。

⑤次の隊長は「馬」で、この男は大のアヘン中毒で困り、オロチョン族に頼んで殺してもらう。これが縁でオロチョン族に請われるまま四年間、山中でオロチョン族と一緒に生活する。

⑥。③で逃げた時は私の他、日本軍人は田中軍曹（②で八路軍から光複軍へ④で光複軍から八路軍へ寝返った人）と脇田明と三人だけだったが、途中で日東一郎が加わるも、日東はサナダ虫に侵され後日死亡する。

⑦昭和二十一年九月頃、中国人を含め二十人程いたが、十月末に三人に減り、二站で中国人を仲間にして十六人となり、十一月に五人に減るなど、離合集散を繰り返して興安嶺を根城にして、時には黒龍江江岸まで馬賊生活をした。

⑧。⑦の頃、馬場信一と出会うが、両足共凍傷にかかりイザリ同様な体であった。又、山本は自殺する。こうして二～三年の間は馬賊生活で、食べ物が無くなると山から下りて、部落を襲撃し馬や、食糧を略奪して生活した。その内、

八路軍の勢力が強くなってきて、我々日本人三人がオロチョン族の中に隠れていることも知られ、馬賊生活も八路軍の治安努力で苦しくなり、遂に逮捕されチチハル刑務所に投獄される。

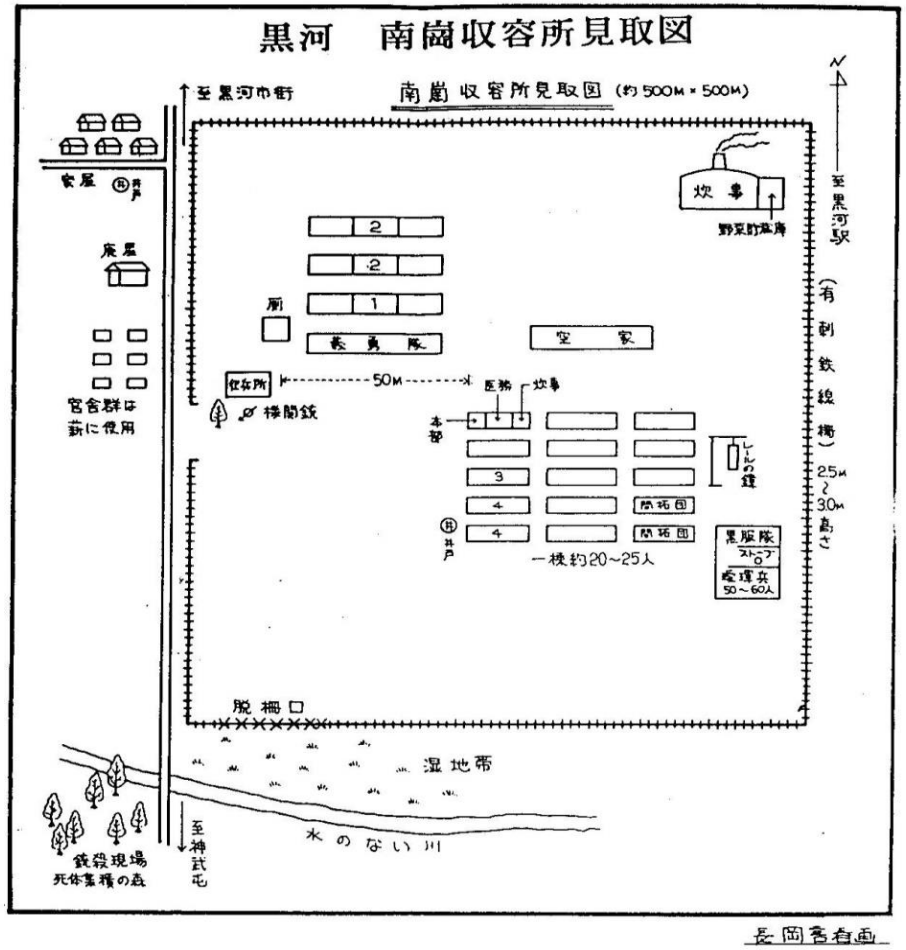
⑨昭和二十四年五月刑務所から私だけ、改造労働大隊に回され、前述の馬場、脇田と別れる。（脇田は厚生省記録に昭和二十一年六月二十三日死亡と記録されているが、私より早く帰国した黒河事件関係者の証言と思うが、①から私と同一行動で、昭和二十四年五月まで間違いなく、チチハル刑務所に私と一緒にいた。）

⑩昭和二十六年の朝鮮戦争の頃は、改造労働大隊で強制労働に服しながら、長い馬賊生活の総括など、洗脳もさせられたが、重度の胸部疾患で入院。胸部疾患のまま昭和二十八年十月舞鶴に復員。今も入退院を繰り返し、終日、点滴加療の病床生活で、昭和六十三年十月二十八日の『黒河事件体験発表』は出席出来ませんので文章にしました。

尚。文中の田中軍曹は、帰国後死亡したと聞いています。二度と、悲惨な戦争は起こさぬよう、ご参集の皆様に伝言して下さい。

橋詰四郎殿

昭和六十三年十月一日



## 編集後記

★本記録集発刊にあたり、十名の諸兄姉より、貴重な体験記をお寄せ戴き、有り難うございました。

★戦中戦後の厳しい時代での苦難の思い出を、正面から見据えた記録、読む度に涙がこぼれます。

★二〇〇一年九月十一日のアメリカに於ける同時多発テロ以来アフガン、イラク等この地球上に戦火の絶える日が有りません。他方イスラエルとパレスチナの紛争（殺し合い）も果てること無く続いています。

★平成元年から始まったこの「戦争体験を語り継ぐ集い」は、今年で十六年目になりました。

★戦争で傷ついたり死んだりするのは、いつも為政者では無く若者老人子どもなど一般民衆です。

★この地球上から戦争が絶える日まで、微力ながらこの集いを続けて行きます。皆様のご協力を心からお願い致します。


戦時体験記録集（第十一集）

編集・印刷・発行 ---------- 戦争体験を語り継ぐ会

発行年月日 ---------- 平成十六年七月十日

発行部数 ---------- 百五十部